

## 東京大空襲を体験して

### あの哀しみを繰り返さないために

亀谷 敏子

皆さんこんにちは。雨の中、こんなにたくさんいらしていただきありがとうございます。私は今年で八十五歳になりまして、空襲の時は中1の十三歳でありました。空襲センターでよくお話なさっている方が、今年九十二歳で亡くなられたんですけど、その方はお父さんとお姉さんが隅田川から上がった時に埋められて、4日目に死体と対面されて、会いたい人に対面した時よく死体が鼻血を出すというんですけど、鼻血がバーっと出たそうです。そのときにその方は一生分の涙を流してしまったせいか、歳をとってからは涙が一滴も出なくなったとよくおっしゃっていらしたんです。

私は十三歳で母や兄弟にみな死なれたんですけど、その時には茫然自失というか、涙ひとつ出なかったものですから、この頃になってからやたらと悲しくて、母の思いはどんなだったかなとか、自分が歳とって初めて母の思いに思いを致すようになりました。小さい子どもたちが死んでいく時、母がどんな思いで見送ったのかと思うと本当にたまらなくなって、このごろ朝晩泣きながら般若心経を唱えております。私は七十歳くらいになるまで戦争の犠牲者だって、被害者だって思い込んでいたんです。ところが七十歳の時に、あー、私はとんでもない戦争の加害者だったんだっていうことに思いを致したんです。その時に私は尼さんになりたいと思うくらい思いつめたことがありました。

私は小学校に上がった時に、今の森友学園じゃありませんけど、教育勅語を覚えさせられました。日本は大変ありがたい神の国で、神様のような天皇陛下の元にお前たちは生まれたんだということで、歴代の天皇の名前を暗記させられたんですね。神武、綏靖、安寧、懿徳...小さい時に植え付けられちゃってもう忘れたいと思っても忘れられません。意味なんかわからなくても全部暗記させられました。



私は昭和6年11月生まれですから私が生まれた時にはもう満州事変が始まっていて、小学校に上がる時には今度は支那事変が始まっていたんです。ですから学校でそういう教育を受けながら、月に一回は慰問袋を支那前線で働いている兵隊さんに送らされたわけです。家へ帰ると母に手ぬぐいで慰問袋を作ってもらって、その中にお小遣いで買ったキャラメルだとか腐らないものを入れて、兵隊さんにお元気ですか、私は元気で頑張っています。私も少国民として恥ずかしくない生き方をしたいです、とかそんなのを書かされて月一回

送られました。それも小学校二、三年で物がなくなっていきましたからいつの間にかなくなりましたけれど、そういう教育を学校で受けました。

「戦時色が一段と濃く」

毎月のように先生が、兵隊さんに行っている家の子は誰かと子供に手を上げさせて調べて、そうするとそういう子供は先生から特別扱いを受けたわけですね。私もああいう風に先生に扱われたいからお父さんかお兄さんが兵隊に行ってくれないかなと。お父さんは一家の大黒柱だからいなくなったら困るから、お兄ちゃんが早く大きくなって兵隊さんに行ってくれたらいいなと思っていました。結局、軍国主義に凝り固まった少女に育っちゃったわけですね。小学四年生の12月8日に第二次大戦が始まったわけです。愛国心をどんどん植え付けられて、東洋平和のための戦いなんだと、お国の為に頑張らなくてはいけない、アメリカ、イギリスはとんでもない人でなしの大変な国で、宣戦布告するのは当然なのだとそういう教育を受けて、敵国はけしからんということで高学年の時には「ドレミファソラシド」も廃止させられて「はにほへといろは」になりました。

私の家は母が十九歳で結婚したんですね。ですから二十代の頃に五人、三十代になって二人産んだわけです。最初の一人が男の子、そのあとが女の子、私は七人兄弟の三番目です。私が五年生の時に兄が予科練に行きたいと言って、その時兄は十五歳でした。父や母は予科練になんて絶対行かせない、二十歳になれば嫌でも徴兵される、うちは男の子一人だし絶対に行かせないと禁足状態にしたんです。兄は部屋に入れさせられて、母が外に出られないように見張っていた。多分募集期間中だと思ったんですけれど、そういう風にしていました。そうしたら兄に呼び止められて、「敏子、応募用紙買ってきてくれ」と。心の中で私は父と母を非国民だと軽蔑している感じだったので、ものすごく嬉しくて、文房具屋さんで応募用紙を買ってきました。兄はそれに書いて、今度はそれをポストに投げてくれと言いましたので、私はいそいそと投げに行ったんです。

そういうわけで、兄を予科練に行かせたのは私なんですね。父や母は誰がそういう風にしたかは追求しなかったんです。きっと学校からそういう風にさせられたと思ったんですね。ですから私は知らん顔をしてしまったんです。兄は体格が良かったんで甲種合格で喜んで予科練に行ったわけです。その時私は六年生になって田舎に疎開させられていました。田舎の生活もいろいろありました。あの頃は勤労働員で学校の勉強なんかさせられない。兵隊に行っている子のお家の田んぼを手伝いに行かされるとか、松根油を取ったりとか。日本は国連から脱退した時から経済制裁を受けていて、ガソリンなんてなかったものですから、私たち子供に油を取らせて飛行機に使っていたんです。

私は疎開先でおぼと大げんかして、小学校卒業と同時にもう一回家に帰りました。そしたら学校の先生に「敏子さん、これからは東京は危ないのにどうして帰ってきたんだ」と言われましたが、私は危なくてもなんでも東京に帰りたかったんです。兄が出征した時、私は田舎にいて見送れなかったんですけれど、兄は航空隊にいて、ときどき手紙が来ました。いつも面会禁止のスタンプが押してあったので面会には行けなかったんです。そうしたら、今年の暮れには帰れると葉書が来ました。私たちはみんな喜んで、配給制でお菓子なんかもほんの少ししかなかったんですが、食べたくて仕方なかったんですけど、お兄ちゃんが来た時のためにとっておきました。でも兄は帰って来なかったんですね。三月の末まで休暇が伸びたとまた葉書が来たわけです。

「大空襲」

母も、三月になれば学校も切りがいいから、家族水入らずで過ごして、それから疎開しようとして父を説得したんです。それで三月の末まで疎開を伸ばしました。そうしたら3月9日の夜、大空襲がありました。9日の夜、今日の空襲はひどいからと言って母がみんなを起こ

したんですね。で、他の兄弟は起きたんですけれど、私は血圧がすごく低くて朝はなかなか起きられないので、その時も子どものくせに気分が悪くて「死んでもいいから行かないよ」と言って寝ていました。

ふだんは自分たちで作った防空壕に入っていいわけですけど、大きな空襲の時は、深川の白河町の、町内で唯一のビルの地下のお味噌屋さんが避難先になっていたんです。母はその店で土日だけアルバイトしていたんですね。7人の子どもたちにごはんを食べさせるというのは大変なことでした。味噌屋さんというのはお米が原料なわけですから、小さい弟を連れていくとおにぎりをいっぱい作って持たせてくれました。あの頃は保育園もないですから母は大きい子に小さい子を任せて味噌屋に働きに行ったわけです。

夜中の十二時過ぎに、そのお味噌屋さんに行こうと言って、でも私だけが寝床の中でぐずぐずしていたので、母はそれじゃ仕方ないと言って姉と小さい子を連れて避難しました。母は玄関先で「今頃空襲のサイレンが鳴っているよ。まったく日本の軍部は何をしてるんだろうね」つぶやきながら出て行きました。それが私が聞いた母の最後の言葉でした。母たちが行ったあと、私はいい気になって寝ていました。そしたら父が家に帰って来ました。その時父はたぶん四十八歳で、その前年に徴兵令が改正されて四十五歳まで徴兵されるようになったんですね。ですから甲種とか乙種とか、目が悪かったり手が少し短くても徴兵されるようになっていて、町の中に若い男の人がいなかったんです。ですから父がメガホンを持って「今日の空襲はひどいからみんな味噌屋に避難するように」と言って町内を駆けずり回って、それから家に帰って来てみたら、当然誰もいないはずが私が床の中にいましたから「ばか、何してるんだ。もう火が回っているんだぞ」と叩き起こされました。それから味噌屋に避難して行ったわけです。その時に父が「あれ、雨かな」と言って空を見上げた。私も空を見上げたら、お星様が綺麗に輝いていたんですね。雨じゃないなと思って。下町を焼き尽くすにはガソリンを入れた焼夷弾を落とせということで、そのガソリンが顔にかかったらしいんです。



私たち二人で味噌屋さんに行ったら地下室も一階も超満員。私たちは荷物がなかったのになんとか入れてもらったんです。私はすごくチビだったので大人の間に入って何が起きているのかわからなかったんですけど、十分か十五分くらいしたら、うしろのほうでもものすごい悲鳴が起きたんです。「どうしたの、お父ちゃん」と言ったら、ガラス窓が割れてそこから火が入って来たらしい。それで戸を開けようとしたら外に消防団の人がいて、外は火の海だから危ないと言って戸を押さえて開けなかった。でも向こうからもガラス窓が溶けて火が入っているわけですから、父は強引に戸を開けてみんな出ろと言って、それで私は表へ出た。出た途端に吹き飛ばされてね。今の竜巻みたいな火の風があって、父

が伏せろ、伏せろと言いました。

お味噌屋さんを出たところは（十三軒道路）と言って6メートルの大きな通りだったんです。父はその真ん中辺にいたので私も這って行きました。20メートルくらい先に小名木川っていう大きな川があったんです。父はその川まで行きたかったようですが、風でもってとても行けなかった。川向こうから飛んで来たトタン板を私に持たせてくれまして、ふたりでその陰になって火の粉を防いで進みました。火の粉なんてもんじゃなくて、木の燃えたのなんかがどンドン、どンドン飛んで来て、モンペの裾が燃えたのを父が手で消してくれたりしました。私はこれで死ぬんだなあと思っていたら、父が突然「こっちへ来い」と言って私の手を引っ張って行って、いきなりバツと放り上げたんですね。それが向かいにあった軍事工場で、ちょうど2メートルくらいのコンクリートの塀があったので、そこへ私を投げ込んだわけです。自分もそこへ入りましてね、そこでもトタン板と塀を陰にして、二人で隠れていたわけです。

しばらくして、塀が倒れて、それが屋根みたいになった。そんなこんなで朝を迎えまして、外へ出ました。そしたら死体のごろごろごろごろ転がっていました。それはお味噌屋さんから出た人たちだと思うんですけども、黒焦げにはなっていなかったんです。26メートル道路ですから、ピンク色でまだピクピクしているようなそんな死体もありました。私は運動靴が脱げちゃって、裸足だったんですね。父も裸足でした。道路が熱くて、火傷しそうなくらいでした。煙にやられたと思うんですけど、目を開けると涙がポロポロ出てくる感じ。ですから、目をつぶって歩いていると、つまづくわけですね。で、目を開けてみると死体なんですね。そういうことで死体にぶつかりながら、はす向かいのお味噌屋さんを見たら、一階はまだピンク色になって燃えていました。ですから、とても地下室を見には行けなかった。たぶん地下室は安全なんじゃないかなと漠然と思って、誰か無事だったらここへくるだろうと家の焼け跡に行き、交代で家族を探しに行くことになりました。

まずお前が待っていると行って、父は探しに行きました。国民学校だとか消防署など二、三時間行きましたが、見つからなかったと言って帰って来ました。それでお前が行けと言われて行きましたが、やはり見つからなかった。その日は何も飲まず食わずでしたから、もうここにいつまでもいてもしょうがないということで、父の会社はセメントの会社だから無事かもしれないと言って、会社に行きました。そこも丸焼けだったので清州橋の親会社に行ったら、事務所は燃えていましたけど、工場だけが残っていたんです。昔はセメントを麻袋に入れていましたから、その晩は二人で麻袋にくるまって寝たわけです。そして翌日にまた家族を探しに焼け跡に行き、結局その日も見つからず、食べ物もないしここにいても仕方がないということになりました。父が、深川の避難所は渋谷だ、日本橋まで歩けば地下鉄の銀座線が通っていると行って、私の手を引いて日本橋まで歩きました。そしたら全部きれいに焼けていて、まだ燃えているものもありました。ですから私は東京はもう全滅なんだなと思いました。けれど日本橋からは本当に地下鉄が走っていて、渋谷へ出ることができたんです。

渋谷では普通の営みがまだあって、逆に新鮮な驚きでした。あーまだ東京に無事なところがあつたんだなと思いました。そして国民学校へ行って、そこで初めておにぎりをいただいたんです。でも、普通なら食べ盛りの十三歳ですからおいしいとか覚えていると思うんですが、もうなんの味もないくらい、私はボケーっとしていて、魂が抜けたように、思考力がなくなっていました。そんなことで、父の言う通りに動いていたんです。父はまた、ここにいても仕方ないと、新宿の母の一家の様子を見に行きました。そして新宿は無事だったと言って、夕方迎えに来てくれたんです。ふたりで新宿へ行ってそのまま世話になっ

たわけなのですけど、まあいとこたちから「くさい、くさい」と言われました。10万人も  
の人がいっぺんに死んだわけですし、そういう死体の臭いとか焼け跡の臭いとかがこびり  
ついてたと思うんです。火傷のあともグジュグジュして腐るような感じでした。お  
ばがすぐに銭湯に連れて行ってくれましたが、傷や火傷の痛みを感じないくらい魂が抜け  
た人間みたいになっちゃっていて、本当に何が何だかわからない感じでした。

「対 面」

父は毎日深川に家族を探しに行っていたんですけど、14日の日にお味噌屋さんの地下室  
の死体を出すと言うことで、お前はお母さんたちが着ていたものを知っているだろうから  
今日は一緒に来いと言うことで、おじと三人で深川に行ったわけです。地下室は腿くらい  
まで水が溢れかえっていたらしいんです。私は母が出したと思うんですけど。アルバイト  
に行っていて勝手を知っていましたから。その水が煮えくりかえっちゃいましてね。そ  
れでみんな牛か豚みたいに煮えて柔らかくなっちゃったらしいんです。死体処理班の人も  
熱くて下に入れなかったということで、14日になったと思うんですけど、今みたいに一  
体一体大事に出すなんてもんじゃないですから、どんどんどん（三ツ目通り）にずー  
っと死体を並べたわけです。その時憲兵隊のトラックが4台くらい来ていました。憲兵隊  
の人に10分間だけ検閲を許すと言われて、急いで探しました。母がいました。母は丸坊  
主になっていました。それから一番下の弟は、一歳半でしたけれど、首から上がなかった  
んです。足首から下ありませんでした。五歳になった妹は、胴体だけがありました。十  
歳だった妹はモンペでわかったのですが、腰から下しかなかったんです。私と年子だった  
妹と姉はついに見つかりませんでした。



たぶんあんまり熱いんで上へ上がって行って白骨になっちゃったのではないかと思います。  
ということで母と三人の兄弟のお骨を少しずつ持って焼け跡へ行って、(焼けぼっこ)を  
集めて、小さな鍋に母たちのお骨を入れて燃やしました。翌日、父の田舎である茨城に行  
きました。私は前の年におばと大げんかして出て行ったわけですから、おばからの風当た  
りは強いんです。着るものも何もないですし、今みたいに売っている時代じゃありませんか  
ら、セメント袋で足をくるんで疎開したような感じでした。あの年はすごく寒くて霜柱が  
立つようなところを裸足で麦踏みさせられたり、本当に女中以下の扱いを受けました。私  
はチビでしたから、一番辛かったのは手桶に水を汲んでお風呂に入れる作業でした。あと、  
鴨居のところで蛇がネズミを狙っているのを見ると、都会っ子ですから怖いわけですね。  
それで掃除ができないんです。蛇が怖いというと、蛇なんかなんだと言って、ひっぱたか  
れるくらいの感じでまた連れ戻されて、掃除をさせられたりこき使われました。

その時、兄は土浦へ転勤していて同じ茨城でしたけれど、母たちが死んだというので特別  
休暇をもらってうちへ来ました。そのとき「お前ももう一人前の年なんだからおばさんの

言うことを聞かないとだめだ。おふくろのためにも頑張れ」と言われました。その三ヶ月後に兄も土浦の空襲で死んでしまいました。結局、七人いた私の兄弟はみんな死んでしまったんです。おかげさまで父がいてくれたので、人並みの生活ができてありがたいと思っているんですけど。

「私は殺人者」

先ほども言いましたが、70代の時までは自分は戦争の被害者だと思っていたんです。でも70くらいの時に私は家族を殺した張本人だったんだと思いました。兄を予科練に行かせるために疎開を遅らせて、それでみんな死んでしまったわけですから、私は家族を殺した殺人者だってことにふっと気が付いたんです。そうしたら急に辛くなってしまって、尼さんになろうと思いました。父が死んだ時もそう思いましたけれど、殺人者だと気付いた時は本当にそう思いました。でも70くらいからではとても尼さんになれっこないと思って、今は朝晩、般若信経を唱えてお許しくださいと家族に手を合わせています。おいしいものをもらった時には食べずに持って帰って、死んでしまった弟や妹にお供えします。でも誰も食べてくれないですよ。仏様になっちゃってるわけですから。ですから私は本当に罪深い女だということで、自分を責めています。

歳をとってくると、母の思いというのがわかるようになるんですね。小さい時は「どうして母は私のことを置いて行ってしまったんだろう」と恨みみたいなものしか感じられなかったのですが、歳をとってくると、母がどんなに辛かったか、最後に死んだのは母だったと思うけれど、小さい子どもたちが「お母ちゃん、苦しい、苦しい、熱いよ、熱いよ」と言って死んでいくのを見て、母がどんなに辛い思いで死んでいったかと考えるようになりました。ですから年取ってから泣けて泣けてしょうがない思いです。戦争ほど罪深いものはないと思います。戦争というのは、被害者だけじゃなく加害者も生むものですよ。ですからこの世で何が一番罪深いかと言えば戦争だと思います。



昔、チャップリンの「殺人狂時代」という映画がありました。主人公のチャップリンが四人か五人殺して死刑台に上る時、「四人や五人殺してなんで死刑にならなくてはいけないのだ。戦争を起こした人間は何十万、何百万と殺してもみんな勲章をもらっているではないか。おかしいではないか」とうそぶきながら消えていくのですが、私は本当にそう思います。

下町一帯を焼き尽くすことを提案した人が、戦後、岸内閣か佐藤内閣の時でしょうか、警察予備隊を作った、自衛隊を作ったという功勞によって勲一をもらってるんですね。私も戦後、公務員になったりもしたんですけど、局長なんかでもなかなか勲章なんてもらえない、そういう時代に勲一なんかあげているわけです、日本の政府は。ということでチャップリンがうそぶいたように本当にひどいことを日本の政府はやっているわけです。昨日

うちの公民館で「二十四の瞳」を上映したんですけれど、木下恵介という人は昭和18年に戦争に関する映画を作っているんですね。それは田中絹代がお母さんで、兵隊に行く息子を見送る時にどンドンどンドン追いかけて行くんです。それが陸軍省から女々しい、あんな女々しい映画を作ってはいけないと木下恵介は非難されて、自分から撮影所をやめて郷里に引きこもるんですね。それで、その前に徴兵制で兵隊に行くんですけれど、「せめて、せめて平和憲法を守りぬかなければ、愚かな戦争で死んだ人たちの魂は浮ばれません。それが誓いであり、供養です」そういう詩を作って死んでいった訳なんです。

こうして平和憲法が危なくなっている時代になって、私は平和憲法だけは守らなくてはならないと思います。72年間戦争に巻き込まれないできたのは平和憲法があったおかげだと思います。ですからせめて平和憲法を守らなければ、日本人は310万人、中国人が1500万から2000万人、東南アジアの人は3000万人死んだであろうと言われてるんですけれど、そういう人たちの魂は本当に浮ばれないと思います。ですから、平和だけは守っていきたいなと私はしみじみ思っています。そのために一生懸命考えると、私が家族を殺してしまった供養にもなるのではないかなと思っています。

今日のご静聴ありがとうございました。 完